



Title	諏訪明神縁起の研究 : 諏訪信仰の神話世界 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	間枝, 遼太郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15055号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/85410">https://hdl.handle.net/2115/85410</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Ryotaro_Maeda_review.pdf, 審査の要旨



# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 間 枝 遼 太 郎

主査 教授 金 沢 英 之  
審査委員 副査 准教授 野 本 東 生  
副査 准教授 蓑 島 栄 紀

## 学位論文題名

諏訪明神縁起の研究—諏訪信仰の神話世界—

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文第一部第一章「『諏方大明神画詞』諸本考」は、広範な調査に基づき、従来知られていなかった新出の写本の存在を複数指摘し、それらの系統関係についても新たな知見を提示したもので、『諏方大明神画詞』に関する基礎研究として高く評価できる。

第一部第二章「『先代旧事本紀』の受容と神話の変奏」は、『画詞』において諏訪明神縁起の中心となる国譲り神話が、卜部氏による改編を経た『先代旧事本紀』の利用に基づくものであったことを明らかにし、その改編の意義を論じて、諏訪信仰の解明のみならず『先代旧事本紀』のような古代に生まれた神話テキストの変奏という観点からも有意義な論となっている。

第一部第三章「『諏方大明神画詞』における神功皇后三韓出兵譚」では、神話の時代に続く歴史時代に位置づけられた、神功皇后の三韓出兵譚について、それが同時代の類似の説話とは一線を画す特徴を持つことを指摘し、さらに『画詞』の作者である諏方円忠と、北朝及び室町幕府とのつながりを背景として、『画詞』が北朝の天皇を称揚し、その正統性を担保する意義を担ったテキストであったことを論じる。『画詞』というテキストの、単なる宗教的な縁起譚ということとどまらない資料性を指摘し、従来の諸研究における『画詞』の扱いに一石を投じる論である。

第二部第一章「『諏方大明神画詞』諏方社祭絵第四、六月晦日条考」では、近代以降の諸研究において、この縁起譚の文脈が正しく読解されていなかったことを指摘し、新たな読みを提示する。多様なテキストにおける一元化されない神話のありようという観点からも、諏方縁起の理解に新たな視点を開くものである。

第二部第二章「諏訪明神縁起における聖徳太子伝の受容と展開」では、第一章で見た『画詞』から『講式』への縁起譚の変容について、その原因を各々のテキストの性質の違いと、『講式』における聖徳太子伝の影響という観点から解明する。こうして変容した諏訪明神の縁起が、それ以降の中世・近世のテキストへと引き継がれて行かれたことが示され、諏訪信仰の動態の解明という点で重要な位置を占める論である。

第二部第三章「諏訪信仰における聖徳太子伝の影響」もまた、縁起譚におけるモリヤの変容に着目して、太子伝の影響とその射程がより詳細に検討されている。その分析を通じ、諏訪信仰を考える上で重要な資料でありながら、従来成立年代について議論のあった『諏方信重解状』について、『画詞』『講式』よりも後代のものであることが示される。こうした関連資料の位置づけへの貢献も、本学位論文の特筆すべき成果である。

第三部第一章「国譲り神話と近世諏訪明神縁起」では、近世に流布した諏方縁起譚において、林羅山『本朝神社考』の影響が大であったこと、さらにそれが中世の吉田兼俱による『日本書紀』講義に遡るものであったことが示される。さらに、近世に流布した略縁起類の分析を通じ、諏訪明神が天から降臨した神へと変容して行くさまが描き出される。

その一方で、『画詞』における国譲り神話が、近世にはどのように受容されていったのかを論じたのが第三部第二章「『諏方大明神画詞』の受容史」である。ここでは、主に近世後期の国学者に『画詞』の受容がなされていったこと、それが近代以降の研究における『画詞』の位置づけへと

つながっていったことが示され、第一章と相俟って神話の多様な享受の実態を明らかにしている。

・学位授与に関する委員会の所見

本学位論文は、諏訪明神縁起を中心とした諏訪信仰の展開という立脚点から出発しながら、そこに『先代旧事本紀』や聖徳太子伝との関わりという観点を導入して、ひろく歴史を通じたテキストの運動の実態を析出する論となっており、文献調査と細かな資料の読みに基づきつつ、『画詞』における主要な諏訪明神縁起の多様な側面を追い、全体として大きな展望を得ることに成功している点に大きな成果を認められる。

また、諏訪信仰に関する諸文献の資料批判を行い、これまで明確に位置づけられてこなかった成立年代や影響関係などを多く明らかにした点も高く評価することができる。

本論文は付論も含め全10章で構成されるが、そのうち8章がすでに専門の学術誌上で公刊済みもしくは公刊予定となっており、学問的水準の高さはその点からも保証されているといえよう。

一方、取り扱う時代が中世を中心としながらも、部分的に上代から近世にまで及び、内容や視点も多岐にわたる論であるため、ともすれば論文全体の焦点が絞りにくくなるのではないか、あるいは各論の間で重複する記述がまま見受けられる等の指摘が審査の席上なされたが、いずれも本論文の成果を大きく損なうものではない。

以上の審査結果により、本審査委員会では、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。